ただのFランク探索者さん、うっかりSランク魔物をぶっとばす

Frank tansakushasan, ukkari Srank mamono wo buttobasu.

規格外ダンジョンに住んでいるので、無自覚に最強でした

3

著
むらくも航

illust.
JYOTA

主な登場人物



彦根ホシ

Fランク探索者の高校生。
配信で発揮した規格外の
実力が話題を呼び、
大人気配信者となった。

ヤマタノオロチ

彦根家の自宅ダンジョンに
封印されていた伝説の魔物。
いかにも恐ろしげだが……？

彦根ギンガ

ホシの祖父。
伝説的な探索者だったが、
四年前から行方不明に。

アマテラス

自宅ダンジョンの最奥に
住む女神。
ギンガの行方を追う
ホシに試練を与える。

天の川ナナミ

ホシの幼馴染。Bランク探索者で、
ダンジョン配信者として
人気を博している。

彦根家のペットたち

めろん

わたあめ

いちご

プロローグ　のんびりした日々の中で

「どうも、彦根ホシでーす」

俺は草原に寝そべりながら、配信に使用している浮遊型カメラに話しかけた。

今は休日の日中。のんびりできる時間帯に、配信を開始した。

「今日もいい天気だなあ……地下だけど」

ここは自宅ダンジョンの地下一階。自然豊かで、外の天気とは関係なく一年中晴れている。

休日に落ち着くには、ぴったりと言える場所だ。

すると、配信に早速コメントが流れてくる。

《こんにちはー》

《どうもー》

《のどかな始まり》

《今日も配信ありがとう》

コメントのほとんどが、今の雰囲気に合ったゆるい挨拶だ。
この速さでコメントをくれるとなると、きっと常連さんだな。
配信は『雑談』と題しているので、ゆったりした雰囲気はありがたい。
そんな中で、あるコメントにびくっと体を起こす。

《今日も人を星にしてますか？》

「し、してません!!」
俺は反射的にツッコミを入れた。
配信開始から一分程度。今日も早速このコメントがついてしまった。
しかも、その勢いは止まらない。

《星になれ》
《お、今日も星にしてるね》
《俺はかっこいいと思ったよ！笑》
《僕も星になりたいです》
《星にさせてください》

「も、もうやめてくださいー！」
これは、先日のイベントであった、俺の行動から始まった流行だ。
そのイベントとは――玉依家との対決。
俺たち彦根家は、玉依玄雲や流転君をはじめとする『玉依家』と、ダンジョンを通して全面対決を行った。
それはもう大きな反響を呼び、終了後もしばらく話題となった。
中でも、俺が向こうの頭――玄雲に『星になれ』と言い放ち、ぶっとばしたことは最も注目を集めてしまった。
「まったくもう……」
そして、あれから二週間。
先日、みんなで流れ星を眺めた夜会なども挟みながら、何度か配信を行っていた。
その度にこんな調子でいじられている。
今まで、いくつか配信内のブームはあったけど、今回もしばらく言われそうだ。
べ、別にかっこいいと思って言ったわけじゃないんだからね！
なんて思い返していると、次のコメントが目につく。

《彦根家のみんなもいますか？》

「いますよ。ほらあそこー」
俺は答えながら、カメラの向きをくるっと変えた。
画角には奥で遊ぶ三匹のペットが映る。
「きゅい！」
「わふっ！」
「ぼぉっ！」
めろん、わたあめ、いちごだ。
俺の視線に気づくと、みんな嬉しそうな顔をしながら、猛スピードで向かってくる。
「きゅ！」
「わふ！」
「ぼお！」
「ははっ！　遊んでていいのに～」
ドゴオッ！
俺は三匹の勢いを受け止めながら、わしゃわしゃと毛並みを撫でた。

《かわいいー!!》
《いやいや勢いえっぐｗ》
《なんかすごい音鳴ってて草》

《ホシ君にはノーダメージ》
《もっふもふ！》
《癒しだ……》

「ははっ。やっぱり甘えん坊になったかな？」
玉依家との対決は、人同士でという話だったから、三匹にはお留守番をしてもらっていた。
エリカ姉さんやブルーハワイが人なのかは怪しいけど……
とにかく、それで寂しい思いをしたのか、ペットたちは俺が帰ってきてから普段以上に甘えてくるようになっていた。
また、その時に驚いたことが一つ。
「みんなも玉依家との対決を見ててくれたんだよねー」
「わふっ！」
「ははっ、現代っ子だなあ」
わたあめが頷いた通り、三匹は仲良く並び、スマートテレビでイベントを見ていたらしい。
地下にはなんでも揃っているので、生活面は心配していなかった。だけど、まさか対決の方を楽しんでいたとは予想外だ。

《いやおかしいだろｗ》

《頭良すぎて草》
《想像したらシュールすぎる笑》
《現代っ子とかそういう問題じゃねえｗｗｗ》

多少不思議だけど、暇ではなかったみたいで俺としては安心した。それに、最近では新しい遊び相手もできたみたい。

俺のもとにやってきたペットを追いかけるように、後ろから声が聞こえた。

「この子たち、本当に体力が無尽蔵なんですけど……」

「流転君と遊ぶのが楽しいんだよ！」

声の主は玉依家から来た流転君。彼は、対決をした玉依家の長男で、俺と同い年の友達だ。

イベントの中で意気投合して、今はこの家に居候している。

「ペットたちからも好評だよ」

「そ、それなら良かったですが……」

正直、流転君の見た目はちょっぴり迫力がある。ガタイもいいので、俺も怖い人なのかと思っていたけど、イベントの最後で勘違いだったと判明した。

本当は怯えがちで、人思いの優しい人だったんだ。

そんな性格を見抜いたのか、ペットたちも流転君とすぐに馴染み、今ではよく相手をしてくれている。

〝魔素を操る〟という能力を持っていて、実力的にも問題なしだ。

「これからもよろしくね！」

「は、はは……僕も体力がつきそうだなぁ」

その青ざめた顔色を見るに、振り回されている、の方が正しいかもしれないけど。

そんな流転君は、まだ当分こちらにいられるみたい。玉依家は、抱えていた問題が色々と浮き彫りになり、しばらくは戻ることが難しいそう。

流転君も楽しんでくれているみたいなので、俺としてはラッキーだ。

ちなみに、玉依家との対決で得た仲間はもう一匹。

「そういえば、ヌッシーも元気にしてるらしいよ」

「あの子、本当に飼ったんですね……」

それが〝ヌッシー〟だ。

ヌッシーは対決の後半、こちら陣営の味方をしてくれた魔物のこと。

その正体は、『ツワモノザウルス』という恐竜型の種族だ。玉依家ダンジョン下層の主だったことから、そう名付けられた。

飼い主は、名付け親でもあるナナミだ。

《ナナミンのお披露目配信も見たぞ！》
《ヌッシーかわいかったなあｗ》

《あのサイズなら飼いたい笑》
《ホシ君ちのペットみたいだよな》
《あれが暴れてたツワモノザウルスとはなあ……ｗ》

「ははっ、すっかりペットでしたね」
ヌッシーは、イベント直後からずっとナナミに懐いていた。ナナミも手放したくなかったみたいで、直接ギルドに許可を求めたんだ。
ギルドの支部局長を務める責野さんの尽力もあり、正式に承認を得たらしい。
「ナナミも嬉しそうでしたし」
そんなヌッシーは、うちのペットみたいに、普段は小さな形態を維持している。ダンジョン外でも生きられる魔核を保有していたからだ。
おかげでナナミも面倒を見ることができて、一緒に配信したり、探索に行ったりすることもあるんだとか。配信外でも、ナナミからはたまに写真や動画が送られてくる。
『ぐる♪』と鳴くヌッシーの姿はとても愛くるしい。
そうして思い返していると、改めて感じることが一つ。
「まあ、色々とあったイベントでしたねー」
あの対決では、流転君やヌッシーの他にも、様々な出来事があった。
エリカ姉さんとイナリさんが本気で戦ったり。そこにブルーハワイが乱入したり。ナナミやヒカリさんの成長が見られた後、最後はみんなで強力な魔物を倒したり。
あの対決の発端は、妖狐たちの親分であるイナリさんが、向こうに懐柔されたこと。
だけど、あんな風に直接ぶつからないと、分からない想いがあったことも事実だ。
改めて振り返れば、各々が成長できたいい機会だったと思う。今はそれを乗り越えて、より家族として団結できたからね。
そんな事を考えていると、コメントがその後の近況を尋ねてくる。

《そういえば、イナリさんはどうなったんですか？》

「イナリさんは、とりあえず神社に帰ってもらいました」
イナリさんについて報告しつつ、俺は目を細める。
つい口から出てしまったのは、俺の本音だ。
「あの人……というか、地下三階はトラブルメーカーなので……」

《イナリさんも大概だからな笑》
《ホシ君に言われるって相当だろｗ》
《次会ったらトラブル起きそう》
《→おいそれフラグ……》

乗り越えたとはいえ、正直この気持ちは変わらない。
対決が中々ハードだったこともあり、今は平穏に過ごしたかった。
しばらくは地下三階には関わらないでおこう――と、思ったのも束の間。
「ホシー!!」
「え」
勢いよく扉が開き、高い声が聞こえてきた。

《あ、この声は！》
《爆速フラグ回収!?》

その特徴的な声に、気づいた視聴者もいるだろう。
息を切らしながら走ってきたのは――イナリさんだ。
「ホシ、聞いてくれぬかー！」
「あのー」
対して、俺はじっと目を向ける。
「しばらくは、おとなしくしてほしいって言ったはずじゃ……」
「わらわもそう思っておったが、緊急事態なんじゃ！」

「ん？」
イナリさんの表情が普通ではなかった。冗談ではなさそうなので、俺は体を起こして少し真剣になった。
すると、イナリさんは慌ただしく伝えてきた。
「地下三階に、瘴気が充満し始めておる！」
「え、それって！」
「ああ、おそらく奴が目覚めたのじゃ」
「……！」
その言葉には、俺も思わず息を呑んだ。

《イナリさんが焦ってる!?》
《奴って誰だ……？》
《まさか新しい住人か？》

確かにこれは緊急事態だ。地下三階で瘴気と言えば、一つしか思い浮かばない。
「仕方ない。様子を見に行きますか」
俺は立ち上がり、すぐに準備を始めた。
「ヤマタノオロチさんのもとへ」

第一章　ヤマタノオロチさん

「様子を見に行きますか。ヤマタノオロチさんのもとへ」
イナリさんから、地下三階に瘴気が発生したという報告を聞き、俺はすくっと立ち上がる。
そんな言葉にコメント欄がざわついている。

《ヤマタノオロチさん!?》
《八つの頭がある蛇だよね？？》
《さらっとすごい事言ってて草》
《地下三階は和風なの？ｗ》
《日本神話はじめました？》

「まー、そうですね。大体イメージ通りだと思います」
俺は質問に答えながら、地下三階へと向かう準備を始める。
ペットたち、イナリさん、あと流転君にも呼びかけて。

「流転君も行こうよ！」
「はい!?　ぼ、僕ですか!?」
「うん！　一緒に地下三階を探検するって言ってたじゃん！」
「……っ」
流転君がこちらに居候するという話が出た時、こういう約束をしていた。でも、流転君は素直に頷かない。
流転君が何か考えるように迷っている中、ふと地下一階の扉が開いた。
そこから見えたのは、黄緑色の長い髪をしたエルフ――エリカ姉さんだ。
「なんだか騒がしいみたいだけど、どうかしたかしら」
「……！」
その姿に、流転君はぱっと顔を向けた。
「あ、あー！　すみません、ホシさん！」
流転君は姉さんにダッと駆け寄ると、給仕係のように跪いた。
「僕は、エリカさんのお手伝いをしなければいけないんです！」
「えー、そうなの？」
「はい！　さあエリカさん、いつものように僕を使って――」
流転君は、すがるように姉さんを見上げた。
対して姉さんは、あしらうように口にする。

「あら。ホシ君が優先に決まってるでしょ」
「――え」
普段から流転君は、姉さんやブルーハワイにこき使われている。俺も止めるようにはしているけど、自らやっているそうだ。
そのはずなのに、今日の姉さんは求めていないらしい。
姉さんは不敵な笑みを浮かべると、ひらひらっと手を振った。
「うふふふっ。行ってらっしゃい」
「……ハイ」
その圧に、流転君は小さく頷いた。がっくり肩を落としたのは気のせいかな。
何はともあれ、一緒に来てくれるらしいので、俺は素直に気持ちを伝える。
「流転君がいたら心強いよ！」
「は、ははっ……終わった」
最後の方はよく聞こえなかったけど、流転君も笑ってくれた。
そんなこんなで、俺たちはいざ、地下三階へ向かうことになった。

◆

「あー、これは……」

地下へと下りて行き、地下三階の扉を開く。
その中の景色は、前回見た時とは全く違っていた。
「間違いなく瘴気ですね」
「うむ。そうであろう」
普段の地下三階には、川が流れ、木々が立ち並ぶ、美しい林道が広がっている。
でも今は、景観に若干紫色の霧がかかっていた。入口でこの濃度なら、この先の霧はもっと濃いかもしれない。
自然が汚染されているわけではなさそうだけど、綺麗とは言えなかった。

《その霧が瘴気なのか》
《せっかくの地下三階が……泣》
《入口付近にまで来てるとはなあ》
《これって大丈夫なのか？》

コメント欄には、続々と心配の声が寄せられている。
みんなが心配しているのは、イナリさんや妖狐（ようこ）の住む場所――『妖狐神社（ようこじんじゃ）』だろう。
特に小さな妖狐たちは、初登場時からかわいくて人気がある。この前の『親睦会（しんぼくかい）』でも、その子たちに関する話題が大きく上がっていた。

それに対して、俺はひとまず推測を共有する。
「この濃さなら、妖狐神社までは大丈夫そうですね。その先は、ちょっと見ないと分かりませんけど」
「とりあえず、わらわは神社へ戻るぞ！」
「そうしましょう」
妖狐たちの親分として、イナリさんはいつになく必死だ。
ならば、ここは一刻も早く神社に向かわなければ。
「じゃあ――はい」
「うむ」
俺は真剣な面持ちのまま、イナリさんの尻尾の一つを掴む。
「ほら、流転君も掴んで」
「え？　は、はぁ」
俺の呼びかけに、流転君は訳が分からない様子のまま、同じ尻尾を掴んだ。ペットたちも次々に続くと、やがてみんなの体がふわりと浮く。
イナリさんの掴んだ部分以外の尻尾が、高速に回り始めたんだ。
「ゆくぞ！【イナリコプター】！」
「うーん、快適」

《この技出たあああ！》
《これ便利過ぎだろｗｗ》
《対決の時から乱用してて草》
《絶対お気に入りじゃん笑》

【イナリコプター】は、すっかりイナリさんのシンボルとなった技。玉依家との対決の中で、エリカ姉さんと戦った時に編み出したらしい。
それ以来、よほど気に入ったのか、イベント内でも乱発していた。
そんな空の旅に揺られていると、すぐに目的地が見えてくる。
「よかった。そこまで瘴気は濃くないですね」
「うむ！　ひとまず着陸するぞ！」
イナリさんは徐々に高度を下げ、妖狐神社に俺たちを運ぶ。
イナリさんは真っ先に中へ駆け込んだ。俺たちもそれに続く。
「大丈夫か、お前たちー！」
「「こーん……」」
少しの間でも、子分の妖狐たちが心配だったみたいだ。
イナリさんは、妖狐たちを抱きながら、声を上げて謝る。
「すまぬ、苦しい思いをさせて！」

「「こんこん！」」
対して、妖狐たちは「大丈夫だよ」と首を横に振る。親分への敬意もあって、いい子たちだ。
そんな健気な姿に、イナリさんは感動を言葉にした。
「おお、わらわをまだ慕ってくれるか！　金目に釣られて玉依家へ行き、たらふく美味しい物を食べ、イベントで大注目を浴びた、こんなわらわを！」
「「……」」
しかし、それには黙るしかない。

《改めて聞いたらひどくて草》
《イナリさん終わってるだろｗ》
《こんな親分嫌だｗｗｗ》
《人間社会ならパワハラで訴えられてる》

俺も心配だったので、イナリさんに続いて妖狐たちの傍に膝をつく。
「こっちにおいで」
「こん！」
ケガ無し、症状無し、抱き心地は――うん、素晴らしい。
久しぶりにもふもふの感触を味わうと、俺は妖狐ちゃんを撫でた。

「良かった。妖狐たちの実害は無さそうですね」
「こやつらも小さいながら魔核を持つからの。多少の抵抗力はあるんじゃ」
「でも、これ以上瘴気が充満すると危なそうです」
「その通りじゃな……」
心配そうな顔のイナリさんを横目に、俺は小さな妖狐をむぎゅりと抱きしめる。
このかわいい存在を守るため、俺は決意した。
「じゃあ、イナリさんはここで待っててください」
「なっ、ホシ!?」
「イナリさんは、ひどいし自己中だし終わってますけど、なんだかんだ親分です。妖狐たちの傍にいてあげてください」
「お主も中々ひどくない？」
半分冗談だけど、もう半分は本気で伝える。
「妖狐たちの体調が一番分かるのは、イナリさんですから。その間に、俺たちが瘴気の問題を解決します」
「……！　す、すまぬ！」
「いえ、妖狐たちは心配ですから」
「妖狐たちは？」

《ホシくーんw》
《イナリさんは心配されてなくて草》
《辛辣なホシ君笑う》
《この関係好きだわw》

イナリさんは所々首を傾げつつ、最後はこちらに頭を下げた。
それはもう地面につきそうなぐらいに。
「お、恩に着る！　これで貸し一つと思ってよいからの！」
「今のところ貸し百ぐらいありますけどね」
ひとまず、イナリさんとのやり取りはここまでにして、先へ進むことにする。
この程度の瘴気なら、神社もしばらくは問題ないはずだ。
俺は周りを見渡すと、再度出発した。
「行こう。流転君、みんな」
「は、はい……」
「きゅ！」
「わふ！」
「ぼぉっ！」
流転君を含め、みんな気合いの入った表情をしている。

向かう先は、そのままヤマタノオロチさんのもとだ。
でも、イナリさんを神社に残してきた今、上空から行くことはできない。この充満する瘴気の中を地道に進むしかない。
なんて思っていると、コメントから質問が飛んでくる。

《そもそも瘴気ってなんなんだ？》

俺も頭で思い出しながら、整理するように答えた。
「姉さん曰く、結論は魔素みたいです」
「え、魔素なんですか？」
それに流転君が食いつく。
そしてキリッと勇ましい顔で一歩前に出た。
「だったら、ここは僕にやらせてください。魔素の操作は得意です！」
「あ、でも――」
「うおおおおお！」
紫色の霧をなんとかしようと、流転君が腕を激しく動かす。瘴気の正体が魔素なら、〝魔素を操る力〟が使えると思ったんだろう。
俺の話を聞かないほど必死になってくれる。

だけど――
「あ、あれ……!?」
少し風が吹いたように動いたものの、瘴気を晴らすことは出来ない。
流転君は引き続きこねくり回すも、表情は苦しそうだ。
「なんていうか、重い……！」
「やっぱりかー」
瘴気の正体は、魔素に間違いない。
ただ、少し〝特殊〟だそうだ。
「なんか、ヤマタノオロチさんの成分が混じってるとかで、より濃密な魔素なんだって」
「そ、そういうことでしたか……」
俺やペットも魔核持ちとはいえ、吸いすぎは良くないかも。あとは単純に、せっかくの景観が損なわれているし。
そう思っていると、やがて流転君はギブアップして、操作を中断してしまった。
「ハァ、ハァ……僕には、難しそうです……」
対決の時はあれだけ活躍した流転君が、この有様だ。やはり、この瘴気は厄介だな。

《流転君が操作できないだと……？》
《あの流転君が？》

《あの最強無敵の？》
《まじかよ、どうすんだよ！》

「あの、僕を持ち上げるのは勘弁してくださいー！」
その怖めの見た目から、流転君のキャラは勘違いされがちだ。俺とほぼ互角の戦いをしたことも尾を引いて、最強と呼ばれる時もある。
大体は勘違いなんだけど、面白いのでそっとしておく。
「さて……」
それはいいとして、コメント欄にも不安が広がっているのは事実だ。
ならば、ここは家主の俺が解決するべきだろう。
「流転君ありがとう。下がってて」
「ホシさん？」
「どうやら秘策を見せる時が来たみたいだ」
「なんと……！」
瘴気発生は、もはや恒例行事。こうなることを見越し、前回の時にシミュレーションをしていた。
尊敬の眼差しを向ける流転君を横目に、俺は大きく息を吸う。
「すぅぅぅぅ……」
「ん？」

そして、思いっきり息を吐き出した。
「ふぅぅぅぅぅぅ！」
「えええ!?」
魔核から息を吐き出すイメージで、全力で吹いてみた。
すると、なんということでしょう。
視界一面が晴れ上がり、道が開けた。
瘴気が上の方に流されていったんだ。
これで安全に通ることができるだろう。
「よし！」
「いや、よしじゃないですよ!?」

《どこが秘策なんだよｗ》
《力技で草》
《ホシ君に策とか考えられるわけねえだろ……》
《誕生日ケーキのローソクみたい笑》
《誰かのお誕生日会行った？》

なに、友達のお誕生日会から着想を得たのがバレてる。

まあいいか、とにかく霧は晴れた。
ただ、それでも微量は残っているため、今度はいちごに声をかける。
「いちご、お願い」
「ぼぼぉっ！」
バサッと翼を広げると、いちごは俺たちを炎で囲ってくれた。攻撃用の炎じゃないので熱さはなく、代わりに恩恵をもたらしてくれる。
それが〝浄化能力〟だ。
かつての『魔物災害』では、あの大きなボス――【魔塊（まかい）】の破片を浄化するのにも、役立ってくれた。
そのフェニックスらしい能力で、少しの瘴気ならへっちゃらだ。
「それじゃ進むぞー」
「ぼぉっ！」
「やっぱり僕は帰ろうかな……」
ペットたちに比べて、流転君だけはしょんぼりしているけど。
それでも、なんやかんやついてきてくれる辺り、優しい友達だ。
そうして、ようやく態勢が整った俺たちは、再び歩き出した。

◆

それから、歩くことしばらく。
「一本道で助かるなあ」
入口から続く林道は健在で、平坦な道のりが続いている。
魔物や仕掛けの類は一切ない。自分の家なので当たり前だけど。
そんなこんなで、俺たちは時々瘴気を吹き払っては雑談を交えて道を進んでいた。
「う〜ん、わたあめはもふいっ！」
「わふっ！」

《もふもふいいなあ》
《久しぶりにペット長く見れて嬉しい》
《この家族、相変わらず警戒心ねえな……》
《脅威に向かってるとは思えんｗｗ》

だけど、そんな中でもヤマタノオロチさんへの質問は絶えない。

《今までの瘴気とかは大丈夫だったのか？》

「まあ一応。というより、実は俺だけで行くのは今回が初めてなんです。前回までは、おじいちゃんが対処してたので」

《出たおじいちゃん！》
《瘴気とヤマタノオロチって関係あるんだよね？》

「そうですね。そもそも、ヤマタノオロチさん自身が瘴気を生んでるので。目覚めるのと、瘴気の発生は同時に起こります」

《すげえ災害だな》
《さすがヤマタノオロチ》
《でも目覚める度にって大変だな》

「大変ですけど、目覚めるのは四年に一度なので。うちでは恒例行事になってます」

《オリンピックかよｗｗ》
《恒例行事にされてて草》
《なんかすでに格が落ちてきたような……》
《→なわけねえだろ、ヤマタノオロチは怖いに決まってるわ‼》

そうして、林道をさらに進むことしばらく。
道が途切れているのを見て、俺は顔を上げた。
「お、そろそろ見えてくるはずですね」
俺の隣を浮遊するカメラも、前方を映し出した。
「ヤマタノオロチさんの住処（すみか）――『アマガフチ』ですね」

《でっかい山!?》
《大きな川も流れてるぞ！》
《またとんでもないのが出てきたあ！》
《さすが魔境の地下三階ｗ》

「おー、すごいなあ」
地下三階にも流れる、いくつもの『魔素水の川』。それらの上流は、全てこの山に繋がっている。
青紫に煌（きら）めく川はここで合流し、大きな山の付近には湖が出来ていた。
「あ」
そして、そんな連なる山の一か所から、ぬっと大きなものが見えた。
俺たちの存在に気づいたんだろう。

周りのみんなはビクッとして声を上げた。
「わふっ!?」
「きゅいっ!?」
「ぼおっ!?」
「うわあっ!?」
巨大な外見にびっくりしたみたいだ。
その人間の女性みたいな人型の魔物は、不敵な笑みを浮かべた。
「今回は孫が来たのねぇ。シュフフフッ」
山から体を出したあの人が、ヤマタノオロチさんだ。
今までの住人とはまるで規模感が違う。覗かせた巨体は、おおよそ山一つ分の大きさを誇る。
その大きな姿には、コメント欄も加速した。

《山から巨大な人が出てきた!?》
《ていうか女性!?》
《笑い方もヘビだ》
《怖そう……》
《なんて恐ろしい雰囲気なんだ……》

確かに、コメント欄の怯えた反応も分かる。
俺はその壮大さを確かめるように、改めてヤマタノオロチさんを見上げた。
「シュフフフ」
全体を象徴するような、青紫色の髪。真っ直ぐに垂れたそれは、奥の山をなぞるように伸びている。肌は人間とさほど変わらない色をしていながら、妖艶な雰囲気が感じられる姿だ。
そして、その山彦（やまびこ）のように反響している声で、ヤマタノオロチさんは話を始める。
「やはりお主の祖父――ギンガは一緒じゃないのねぇ」
「はい。おじいちゃんはどこへ行ったのやら」
「……？　お主は何も聞いていないのか？」
「え？」
ヤマタノオロチさんは一瞬きょとんと首を傾げる。
だが、ハッと何かを思い出したのか、慌てて訂正をした。
「い、いや、今のは無しよ！　私、なんにも知らない！」
「えー、怪しい。というか、話し方変わりました？」
「……！　私は何も知らないわよ？　シュフフッ」
「無理してる？」
すっと戻った態度に、俺は目を細める。

《あれ？》
《一瞬ボロが出た？》
《そんなわけないだろ！》
《ヤマタノオロチなんて怖いに決まってる》

コメント欄も、ボロが出た派と、怖い存在だと決めつける派に分かれている。
そんな中で、態度を戻したヤマタノオロチさんは、鋭い視線でこちらを睨（にら）む。
「それにしても大きくなったわねぇ。ギンガの孫よ」
「ホシです」
「そうか。お主の小さい姿も、まるで昨日のように思い浮かぶぞ」
古風な口調で威厳（いげん）を取り繕っているようだけど、俺はすかさず伝える。
「そりゃ、四年間ずっと寝てたからでしょ」
「む」

《言われてみればそうだｗ》
《起きたら四年経ってるもんな》
《てか相変わらず物怖じしねえな……》
《ああ、こんなに怖いのに……》

すると、ヤマタノオロチさんはふとカメラに目を向けた。
「で、先程から、それはなあに？　人語が映っているようだけれど」
「配信です。この様子がネット中継されてるんですよ」
「へぇ？　じゃあ――」
好機と見たのか、ヤマタノオロチさんは細長い舌をしゅるしゅると出した。
カメラもそれを引きで捉える。
「この恐ろしい姿を映しているのかしらぁ」

《ひえええええええ‼》
《こえええええ‼》
《これがヤマタノオロチかよ……！》
《近いと一段と迫力があるな……》
《色んなところがデカい……》
《Aランク探索者です。こんな怪物がいるなら今日で引退します》

その姿に、コメント欄は悲鳴で埋まった。やっぱりみんな、ヤマタノオロチさんを勘違いしてるみたいだ。

ここは俺が誤解を解いてあげなければ。
「あの、一ついいですか」
「何かしらぁ？」
「ヤマタノオロチさんの呼び名って、なんでしたっけ」
「むむ」
人々を怯えさせて、愉悦に浸っていたヤマタノオロチさん。
でも、この人にも、ペットや住人みたいに呼び名があったはず。
「おじいちゃんが付けた名前、ありませんでしたっけ？　俺はあんまり覚えてなくて。なんだったかなあ」
「……」
対するヤマタノオロチさんはなぜかはぐらかす。
「……し、知らない」
「え？」
「そんなの知らないわよ！　威厳がなくなるから言わない！」
「うわわっ」
ヤマタノオロチさんがじたばたすると、激しく地面が揺れた。

《あ、あれ？》

《やっぱボロ出てね？》
《もしかして怖くないのか？》

視聴者も徐々にヤマタノオロチさんの本性を疑い始めている。これはもう一押しだな。
「じゃあこれ、あげませんよ？」
「そ、それは……！」
俺はいつも小道具をしまっている、わたあめのもふもふの背中を漁った。
そこから出てきたのは、大きな瓶だ。表面には『秘』と書かれている。
「お、お酒！　持ってきてくれたのね！」
これは『魔素酒』。魔素水に大量のアルコールが混じっているらしい。
エリカ姉さんが準備していて、今回は預かってきていた。
「す、すぐにちょうだい！　もう喉が渇いて！」
「ダメです。呼び名を教えてくれるまでは」
「ま、孫のくせに生意気な～～～！」

《なあこれって……》
《やっぱりヤマタノオロチさんって……》

視聴者も本性に気づき始めたんだろう。
これで呼び名も判明すれば、より親近感が湧くはず。
「……ダ」
「え？」
「ヤマダよ、ヤマダ！　んもー、普通すぎて、この私にふさわしくないでしょう!?」
「あーそれそれ！」
ヤマタノオロチさん――通称ヤマダさん。
そのままでは名前が長いと、おじいちゃんが付けた呼び名だ。
「みなさん、ぜひヤマダさんって呼んであげてくださいね」
「呼ぶなぁ！」

《ヤマダさん!?》
《ヤマダノオロチってこと!?ｗ》
《急に威厳なくなって草》
《おじいちゃんのネーミングセンスｗｗｗ》
《ホシ君ちだなあ笑》
《イナリさんもこんな感じだったな》
《今日も平和な配信でした》

《ヤマダさーん》

本来のヤマダさんは怖くない。種族のプライドからか、威厳を出そうと張り切るだけだ。
そんな恐怖が消え、隣の流転君たちもほっと一息ついていた。
「きゅいぃ」
「よ、良かった……」
ただ、ヤマダさんだけは、顔をぷるぷると震えさせている。
そのまま、みるみるうちに顔に怒りが溜まっていく。
「ちょ、調子に乗りおってぇ……私こんなに怖いのに！」
「自分で言うんですか――って、あ」
「ふん！」
すると、ヤマダさんはしゅるっと伸ばした舌で、魔素酒を奪い取っていった。
元々あげるつもりだったからいいけど、少々乱暴だ。
そして、ヤマダさんは豪快に魔素酒を掲げる。
「こうなったら、実力で恐怖に陥れてやるわ！　がぼぼぼぼ」
「すんごい飲みっぷり」
そのまま頭上から、浴びるように酒を飲み始めた。
アルコールが混じっているとはいえ、元は力の源である〝魔素水〟だ。

それを大量に摂取したことで、ヤマダさんの力がみなぎっていく。
「シュハハハァ！　これよこれぇ！」
「うわあ」
これは完全に酔ったな。
《ヤマダさん酒豪かよ》
《強気になったなー笑》
《酒豪ってか酒カスだなｗ》
《ホシ君引いてて草》
《ホシ君はこんな大人になっちゃダメだよー》
その勢いは止まらず、ヤマダさんは大きく口を広げた。
「私をコケにした罰、受けてもらうわよぉ！　シュオオオオ！」
「……！」
そのまま吹き出したのは、ドス黒い紫色の吐息だ。地下三階に漂っていた瘴気より、ずっと濃い色をしている。
すると、ヤマダさんはしたり顔で言い放った。
「猛毒の煙よ！　それを浴びれば――お前たちは死ぬ！」



「……!?」

《キレた!?》

《バカにしてすみませんでした!》

《この攻撃はやばそうだぞ!》

《許してくださいヤマダさん!》

《みんな避けてくれー!》

瘴気も含め、ヤマダさんの得意技は状態異常による攻撃だ。

でも、この程度なら任せられるな。

「ボウウウウウゥゥゥ……!」

俺の合図を待つまでもなく、いちごが鳴き声を上げて前に出た。

「さっすが」

「何ぃ!?」

ヤマダさんの吐息から守るように、俺たちの周囲を煌(きら)びやかな赤色が囲った。

これは燃え盛る炎。瞬時に覚醒したいちごが生み出した浄化する炎だ。

「ボゥッ」

いちごは吐息を防ぐと、フッと格好をつけたように片翼(かたよく)を広げた。

《いちごだあああ！》
《巨大化してるー!!》
《いちごちゃん大活躍!!》
《可愛さとのギャップえぐい！》
《ちょっとドヤ顔しててかわいい笑》

対するヤマダさんは、パッと目を見開く。
その表情には、どこか悔しさをにじませながら。
「いちごって、あの雛鳥（ひなどり）の!?」
「雛鳥だったのは四年前の話です。それに、いちごだけじゃない」
「……!?」
俺の左右から、さらに二匹が飛び出す。
いちごの活躍に触発されたのか、自分たちも出番だと思ったのかもしれないな。
「ギャオオオオオオオオ！」
「クオオオオオオオン！」
ドラゴンのめろん、フェンリルのわたあめだ。どちらも覚醒し、すでに巨大化している。
三匹の覚醒を目の当たりにし、ヤマダさんは驚きを隠せない。

「まさか、地下一階のちびっ子たち!?」
「そうです」
「くうっ！　こうなったら……！」
とっておきの技を防がれたからか、ヤマダさんは焦った行動に出た。
自身のすぐそこにある山肌を、雑にボコッと殴りつけたのだ。
山の一部分が崩れ、巨大な三角形の形を保ったまま降ってくる。

《山が飛んできた!?》
《攻撃の規模やべえ！》
《巨大すぎんだろ！》

コメントには若干の不安が走るけど……大丈夫、この二匹なら問題ない。
「クオォォォォォォン！」
わたあめは遠吠えを響かせながら高く飛び立つと、自慢の高速移動を見せた。するとその姿はやがて分身して見えてくる。
わたあめの得意技――【わたあめラッシュ】だ。
「クオッ！」
「おおー」

その何十発ものキックで山は徐々に崩れ、複数の亀裂が入る。
あそこまで崩せばあと一撃だ。
そこで好機をうかがっていためろんが、頭から突っ込む。
「ギャオオオ！　――ギャウッ！」
真っ直ぐ飛んで行く様は、まるでロケットだ。その頑丈すぎる体が一気に山を貫通する。
二匹の技により、巨大な山の一部はこちらに届く前に崩壊した。
「おお～」
これには俺も思わず拍手を送る。

《二匹のコンビネーションだあああ！》
《わたあめラッシュ久しぶり！》
《めろんは相変わらず脳筋でワロタ》
《降ってきたのって山だよな……？》
《やっぱペットたちもレベチじゃねｗｗ》
《久しぶりに拍手係のホシ君》

ここまでヤマダさんの技は全く効いていない。それどころか、下に見ていたペット三匹に軽く対処されている。

それが屈辱だったのか、ヤマダさんはさらに力を上昇させていく。
「お、おのれぇ！　では、これならどうじゃぁ～～～！」
「ん」
ヤマダさんが声を上げた途端、山から繋がるいくつもの川が勢いよく溢れ出た。
ざっぱーんと、大元の湖をひっくり返したんだ。
すると起こるのは――洪水だ。
「うわーお」
著しく上がった川の水位は氾濫して、隣の川と合流。それをいくつも繰り返すうちに、どんどん勢いを増していく。
やがて一つの波となった水は、ものすごい速さで迫ってくる。

《本気出してきた!?》
《ヤマタノオロチの洪水か！》
《それっぽい技使うのかよ！》
《ヤマダさんごめんなさい！》
《今度こそやべえって!!》

これには隣の流転君も、俺の袖を引っ張ってくる。

「ホシさんこれは無理です！　早く逃げ――」
「いや、大丈夫」
「ホシさん……!?」
それでも、俺はこの場を動かなかった。
確かに、とてつもない威力だ。少し前なら対処が難しかったかもしれない。
だけど、最近見たんだよね、似たような技。
「今度ブルーハワイと遊ぶ時は、どうやろうか考えてたんだ」
「……ッ！」
「うおおおお――せいやぁっ！」
俺は腰を落とし、ぐっと引いた右腕を前方に放った。
魔素を込めた渾身の拳だ。飛び出した衝撃波は、洪水の中央を真っ直ぐ突っ切っていく。
すると、洪水は左右へ真っ二つに割れた。
「よし！」

《はあああああ!?》
《洪水が割れた!?》
《モーセかよｗｗｗ》
《日本神話に旧約聖書で対抗してて草》

《彼は人ではない、神だ》

「予習してなかったら、ちょっと危なかったかも」
「はは、ホシさん……ははは」
苦笑いを浮かべる流転君の隣で、俺は汗を拭う。
これは、玉依家との対決で、ブルーハワイが戦っていた映像から着想を得たんだ。
あのイベントで、ブルーハワイは【海原創造】という技を見せていた。魔素でお得意の水を放出して、辺り一面を海にするというものだ。
俺も知らない技だったので、ブルーハワイはこっそり練習していたんだろう。かなり強力そうだったから、今度遊ぶ時用に対策を考えていた。
その技が今の状況と重なり、偶然活きた形になった。
そうして、ひとしきり攻撃を防ぐと、ヤマダさんはようやく手を止める。
「その力……それにブルーハワイとは、あのお子ちゃまセイレーンのこと？」
「はい。俺もよく遊んでます」
「ここまで成長しているとは……」
ヤマダさんも、どこか踏ん切りがついたみたいだ。
今度は俺たちを認めるように、ふっと笑みを浮かべた。
「これがギンガの言っていた〝新世代〟なのね」

「ん？」
「いいえ。こちらの話よ」
そして、ヤマダさんはどこか嬉しそうに声を上げる。
「だったら、加減はいらないかしら」
「「シュオオオオ!!」」
「うわっ！」
同時に、ボコボコッと山から出現したのは、七つの巨大な蛇の顔。ヤマダさんのような人型の顔ではない、青紫色のしっかりした蛇のような造形だ。
これでようやく、〝ヤマタノオロチ〟の全貌が明らかになったと言える。
《ついに出たあああ！》
《真のヤマタノオロチだ!!》
《ヤマダさんはセンターなんだな》
《威圧感がすげえ……》
《やっぱり巨大だな……》
おじいちゃんから教えてもらっていたのは、最初からこの八つ首の姿だった。むしろイメージ通りだけど、一つ言えることがある。

この形態の方が、確実に強い。
すると、ヤマダさんは挑発するように語りかけてくる。
「この、真の姿にお前たちが勝てた暁には、私は再び眠りにつくわ。すぐに瘴気も消えるでしょう」
「お」
ヤマダさんも悪いと思っているみたい。俺たちにとって願ったり叶ったりだ。
ただ一つ、ヤマダさんは聞き逃せない言葉も続けた。
「そして、ギンガからの伝言も伝えないとね」
「……！」
おじいちゃんからの伝言？　俺に伝えてない何かがあるのか？
「さあ、全力で来なさい」
「分かりました」
そうとなれば、こちらも本気の態勢を整える。
ペット三匹に流転君も合わせて、俺たちは横一列に並んだ。
「その勝負、受けて立ちます！」
「クォン」
「ギャウ」
「ボオォ」

「と、友達のためなら……！」
ここからが本当の戦いになるだろう。
再び向き合った俺たちに、ヤマダさん（たち？）はニヤリとした。
「その力、計らせてもらうわ！」
そうして、ヤマダさんは意気揚々と声を上げる。
「さあ、やっておしまい！」
「「シュオオオオオ！」」
「……！」
中央のヤマダさんの号令に従い、他の七つの蛇の頭が一斉に動き始めた。
きっとものすごい攻撃が来るはずだ。
まずは相手の動きを見つつ……って、あれ。
「こ、こない？」
他の七体は攻撃せず、何やら言い争いを始めていた。
「シュオ！（お前がいけよ）」
「シュオ？（嫌だよ）」
「シュオッ！（じゃあお前）」
七体はお互いを睨み合い、誰かを先に行かせようとしている。
なんというか、客観的に見て醜い争いだ。

立ち読みサンプル
はここまで

すると、それを見兼ねたヤマダさんが声を上げた。
「あーもう何やってんのよ！　じゃあいけ、端っこ！」
「シュオ!?（僕ですか!?）」
「普段は特に目立ってないでしょ。お前が先行け！」
「シュ、シュオオ！（う、うおお！）」
ヤマダさんに再び指示をされ、端っこの首が無理やり向かってくる。
でも、これは全く問題ない。なんの工夫もなく突っ込んできただけだ。
「ギャウ」
「シャィ～ンッ！」
当然のように、めろんがその首をはたいた。バチコーンと音が鳴った端っこの首は、テニスのラリーのように弾き返される。
その勢いは止まらず、端っこの首は山の麓に激突した。
《ええ……》
《バチコーンで草》
《弱いじゃねえかｗ》
《弱いというかチームワーク×》